

徳山大学と下松市との包括連携協定に基づいた中山間地域づくり・国際交流の取組み

寺田 篤史（徳山大学経済学部）

Keyword： 中山間地域づくり 国際交流 下松市

【目的・背景】

徳山大学は下松市と隣接する周南市に位置し、下松市笠戸島での映画祭開催に教員・学生が協力するなど以前より様々な協働・交流が行われてきた。筆者も2017年より下松市企画財政課と連携し、下松市の中山間地域である米川地区を舞台に課題解決型の授業を実施してきた。こうしたつながりをきっかけの一つとして、徳山大学は2018年3月に下松市と「下松市及び徳山大学の連携協力に関する協定」（以下、包括連携協定）を締結した。この包括連携協定に基づく事業の第一弾として、2018年度前期に発表者担当の「地域ゼミ」において、(1)「中山間地域づくり」(2)「国際交流」をテーマに取り組む課題解決型学修（PBL）を実施することになった。

「地域ゼミ」とは、徳山大学におけるアクティブ・ラーニング推進事業の柱の一つとして置かれた2年次必修のPBL入門科目である（表1）。地域課題の発見・解決を通じた課題対応能力・人間力の向上を目指している。2018年度は15人の教員によって前後期合わせて22講座が用意された（表2）。

教養ゼミ I	地域ゼミ	専門ゼミ I・II
PBL リテラシー 1年次必修	PBL 入門 2年次必修	本格的PBL 3・4年次 経済学部 選択必修 福祉情報学部 必修

表1 徳山大学が目指すPBLによる4年間の継続したAL教育体系のイメージ

平成30年度 地域ゼミ 開講テーマ	
桜ヶ丘高校“総合”プロジェクト（前期）	桜ヶ丘高校“総合”プロジェクト（後期）
メディアの仕事のすばらしさを理解する（前期）	メディアの仕事のすばらしさを理解する（後期）
桜木地区夢プラン～街歩きマップの作成～	高齢者を対象とした運動教室の運営
下松活性化プロジェクト	周南の魅力再発見
周南の政治とまちづくり	地域企業・商店のPR映像を制作し、地域企業の魅力を伝える
徳山大学のTVCMを制作して地域にアピール	リレー・フォー・ライフ・ジャパンやまぐち」企画・準備・運営
西京銀行PBI及びJCリーダーシップ研修	中山間地域を見つめ直す
模擬会社運営－実際に製品を開発して周南市で販売（前期）	周南市を題材にゲームアイデア企画
久米小学校児童と徳山大学留学生との交流	模擬会社運営－実際に製品を開発して、周南市で販売（後期）
ボランティアによる子ども育成事業などの支援活動（前期）	地域のエネルギー政策を提案してみよう！
21世紀フラワーファームで農業ビジネスを体験しよう	ボランティアによる子ども育成事業などの支援活動（後期）

表2 2018年度開講ゼミのテーマ

本研究では、自治体との包括連携協定に基づくPBL実施が学生と地域の両方に持つ意義について検討したい。

【方法】

まず、(1)「中山間地域づくり」については、これまでの連携の経緯から、下松市の中山間地域である米川地区の活性化とりわけ耕作放棄地の活用について取り組むこととなった。とはいえ、半期15回という限られた時間での目に見える成果は期待されておらず、市の担当者の意向としては、数年を見越した連携関係を築きつつ長い目で学生のアイデアを地域活性化に活かしていきたいというものであった。

そこで、すでに当地区で耕作放棄地の再活用に取り組んでいる「米川ゆずの会」にご協力いただき、会が行っているゆず栽培をお手伝いしながら耕作放棄地の活用や地域活性化について考えていくこととなった。

次に、(2)「国際交流」については、下松市内の江口幼稚園において徳山大学の留学生と園児との交流活動を行うこととなった。本幼稚園では、「小さいころから外国人や外国の文化に慣れさせたい」という思いから近隣企業の外国人従業員と行事を開くなど、これまでも国際交流活動に力を入れており、徳山大学に多数在籍している留学生にもこうした交流活動に加わって欲しいというニーズがあった。

そこで、本地域ゼミではゼミ生を日本人と留学生とで別々に募集し（図1）、前者を(1)中山間地域活性化班（または米川班）、後者を(2)国際交流班（または幼稚園班）として1ゼミのなかで独立した2つの活動を行うこととした。

(04)【前期】
「下松活性化プロジェクト」
担当：寺田篤史(a)

- 概要：下松市役所企画財政課地域政策係と連携し、下松市の活性化に向け活動します。(1)中山間地域活性化班、(2)国際交流班（留学生）に分かれ、中山間地域の自然環境保全・美化活動やイベント参加や、幼稚園児と留学生の交流活動を行います。（※内容は変わる可能性があります）
- 履修可能な最大人数：20人（うち留学生5～8名程度）
- 授業日以外・授業時間外の学外活動を数回予定しています。




図1 学生募集スライド

ゼミ活動は大まかに図2のように行われた。なお、国際交流班の活動には大きな方針変更があった。この変更については【結果】において説明する。

活動計画	
オリエンテーション (全体)	
中山間地域活性化班 <ul style="list-style-type: none"> ・米川地区の耕作放棄地へのゆずの植樹 ・米川地区の散策、西平谷地区の見学 ・ゆずなどの作物の世話 ・ゆずの商品化など地域活性化へ向けたミーティング 	国際交流班 <ul style="list-style-type: none"> ・江口幼稚園園長先生との打ち合わせ ・活動方針・内容決定のための話し合い ・留学生との顔合わせ ・幼稚園での活動 (3回程度)
地域ゼミ合同発表会の準備 (全体)	

図2 活動内容 (方針変更後)

本ゼミ活動のフィールドとなった下松市米川地区と江口幼稚園はいずれも徳山大学から車で20分ほどの距離に位置する (図3)。しかしそれぞれ市の山側と海側に位置するため、学外活動の実施には工夫が必要だった。例えば、片方の班を学外引率している間にもう片方の班は大学で学外活動の振り返りや次回の計画立案などを行ったり、どうしても同日に学外に出る必要がある場合は手の空いている教員に引率をお願いしたりした。



図3 下松市全域とゼミの活動場所の位置

また、学生の進捗を確認するため、SNSを活用した。授業の活動報告や振り返り報告は、事前にシートを配布し、授業終了後に内容を記入後、携帯電話でシートを撮影し、SNSのアルバム上にアップロードすることとした。この利点として、大学が用意しているLMSと比べログイン等の手間がかからない、報告内容の原本は手元に残るため「やりっぱなし」になりにくい、メンバー同士で報告内容を共有できる、といったことがある。また、活動中の写真などもPCを経由する必要がないため共有しやすいという

利点があった。

【結果】

本ゼミには16名が参加した。そのうち、10名が(1)中山間地域活性化班、6名が(2)国際交流班としてゼミ活動を行った。以下、班ごとにゼミ活動内容を報告する。

(1) 中山間地域活性化班

活動概要

中山間地域活性化班の活動についてはすでに羽田司・中嶋克成・寺田篤史 (2019) 等で報告をしているので、ここでは簡単に活動概要を紹介することとする。

中山間地域活性化班は、米川ゆずの会が管理している耕作放棄地を一枚お借りして新たにゆずの植樹を行うことから開始した。現地での畑の世話だけでなく、米川地区のなかでも特に山間部に位置する西平谷地区で行われているアマゴの養殖場や戦争遺構の見学をしたり、住民の話の聞いたりするなどして、地域の理解に努めた。

その一方で、教室では米川地区で学生に何ができるかを話し合った。そこでは、若者が行き来することそれ自体が活性化であるとして畑に頻繁に通うことや、あるいはゆずを用いた特産品を提案することなどが話し合われた。話し合いに基づいて計画を立て畑の世話をしたり、特に後者については、ゆずを使った特産品の案を出し学生自ら試作したりするなどした。

- ・4/25 ゆずの植樹・唐辛子の苗の植えつけ
- ・5/9 西平谷地区のアマゴ養殖場見学
- ・5/30 草刈り・えん菜 (空心菜) の植えつけ、地域の方と今後に向けてのミーティング
- ・6/13 西平谷地区のアマゴ試食、戦争遺構見学
- ・7/11以降
草刈り・唐辛子・えん菜 (空心菜) の収穫
唐辛子オイル・ゆずピールの試作
合同発表会へ向けて準備

図4 中山間地域活性化班の活動

生じた問題

しかし、立てた計画を実行するにあたっては多少の問題も生じた。一つは学生間のコミュニケーションである。例えば、畑の世話をしに行くのにいつ誰が行くのかをほかのメンバーが把握していないということがあった。行動はするが同じ目標に向けてメンバーと日程を調整する必要があるという意識に乏しく、独断専行してしまうということがあった。もう一つもコミュニケーションの問題であるが、こちらは外部との関係においてである。特に畑の世話に行く際に畑の管理をしている「米川ゆずの

会」の方への連絡をせず、たまたま通りかかった会の方に対応していただくということがあった。そのほか、畑の世話に行くのに準備も何もなく現地に行く者がおり、現地の方に準備していただいたこともあった。学外での出来事は当事者ではなく、現地の方から連絡を受けた市役所職員の方から知らせていただいた。

こうしたケースはいずれも自分の振る舞いが何を結果するのかに十分に思いを致せないことによるもので、国際交流班においても似たような問題が生じている。これについては後述する。

(2) 国際交流班

ゼミ開始前

国際交流班は、留学生受講生がいないことが前年度末に判明し、ゼミがスタートする前から困難が生じていた。実際には受講希望の留学生はいたものの、学内ルールとして留学生受講者は独自の日本語試験にパスすることが条件となっており、これが高いハードルとなっていた。そこで日本人のゼミ受講予定者から幼稚園での国際交流活動の主旨に賛同する者を数名募ることとした。内容も当初の予定から変更し、留学生担当教員の協力を得てその教員が担当する別の授業の留学生を地域ゼミの日本人ゼミ生が引率・指導し、幼稚園児と留学生との国際交流活動をプロデュースするという形にした。

幼稚園児と交流を行う留学生は秋入学の1年生であり、前述の留学生担当教員による初年次教育を行うゼミ科目（教養ゼミⅠ）の一環で国際交流を行う仕立てとした。それゆえ、本地域ゼミ実施にあたっての幼稚園との打合せはこの留学生担当教員と共に行った。また、その後の国際交流活動にも同行していただいた。

ゼミの活動内容

事前の面談の結果、子供好きのゼミ生6名が幼稚園での国際交流活動に賛同し、国際交流班に参加することとなった。

- 4/18 江口幼稚園園長先生と打合せ
- 4/27 留学生担当教員の授業にお邪魔し、留学生との顔合わせ
- 5/16 国際交流活動（一回目）幼稚園教諭主体
- 6/13 国際交流活動（二回目）ゼミ生主体
- 7/4 国際交流活動（三回目）ゼミ生主体
- 7/18 園長先生を交えて振り返り

※その他の回は、振り返り・次の交流活動の準備・合同発表会の準備を行った

図5 国際交流班の活動

まず、4/18に江口幼稚園を訪問し、ゼミ生と園長先生との打合せが行われた。打合せでは、3回程度の国際交流活動を行うこと、初回の交流活動は留学生と幼稚園児の顔合わせ的な内容にすることが決まった。幼稚園への連絡や道具類の準備は学生で行うこととした。また、留学生を含めた現地への移動は校用車（マイクロバス）を借り、授業時間（3限目 13:10～14:40）を最大限に活用するため昼休み中に出発することとした。その後の授業で留学生に何をしてもらうか等話し合い、4/27に留学生の授業を少し割いていただき、ゼミ生と留学生の顔合わせを行った。そこで留学生の日本語能力等を知り、その後の活動内容を考える材料とした。

5/16に最初の国際交流活動を留学生と園児との顔合わせとして実施した。6名のゼミ生は2名ずつ年少・年中・年長と担当を決めて分かれた。この回では自己紹介と簡単な交流活動を行った。活動時間の遊びなどは幼稚園教諭の主導で行われた。今後、ゼミ生主体で交流活動を企画する際のヒントとするためである。



写真1 ゼミ生が留学生への指示を行う（上）
留学生と幼稚園児の交流（下）

その後、振り返り活動を経て、ゼミ生主体で遊びの内容などを考え留学生と幼稚園児の交流活動を企画するグループワークを行った。ゼミ生企画の交流活動は6/13・7/4に行われた。この間の授業は、「準備⇒実施⇒振

り返り ⇒ 準備 …」という形で実施された。2 回目の交流活動では、年少組は「しっぽとり・フラフープ送り」、年中組は「屋内での紙飛行機作り・屋外での紙飛行機飛ばし」、年長組は「田の字鬼ごっこ・手つなぎ鬼ごっこ」を行った。3 回目の交流活動では、年少・年中組が合同で「折り紙・お絵描き」を、年長組は最初に園の行事のための園児の太鼓練習を見学させていただいた後「フラフープ遊び」を行った。

7/11 以降は全地域ゼミが合同で活動を報告する合同発表会に向けた準備をする予定であったが、園長先生のご提案により園長先生を交えて振り返りの会を設けることとなった。そこで、7/11 の授業では3 回の各交流活動（準備も含む）およびゼミ活動全体を「A 自分は・自分のグループはどうだったか」「B ゼミ全体としてどうだったか」という観点から振り返り、加えて「㊦自分が・自分たちがこの授業・活動を通じて学びとるべきものは何だったのか」を考え、この観点から「㊧実際に自分が・自分たちが何を学べたのか・学べなかったのか」を見直すことを求めた。これを文章の形にして園長先生に事前提出して振り返り会に臨むこととした。

活動振り返り

国際交流班のゼミ生は志願によって活動内容を変更した経緯から比較的モチベーションの高い学生が集まっていた。それにもかかわらず、中山間地域班と同様に自身の振る舞いの影響や結果を考慮しない出来事が散見された。具体的には、部活動のケガによりしばらく授業に出られないことの連絡がなかったり、年少担当が幼稚園に連絡する際に年中・年長担当の分については言及しなかったりといったような、ゼミ生間や外部関係者との間でのコミュニケーションの問題が生じた。また、この班では企画運営するゼミ生とその指示のもと動く留学生との間でも、事前の連絡や打合せにおいて十分なコミュニケーションが取れていなかった。こうした点は園長先生との振り返り会において、改めて指摘がなされ反省が促されることとなった。

一方で、幼稚園児や留学生は交流活動そのものについて大変楽しんでおり、企画運営側の不備がターゲットの不満のもととならない点は救いだった。

【考察・今後の展望】

2 班とも関係者間でのコミュニケーションに難があったが、それぞれの課題に対し計画を立て実行するなど PBL

入門として課題対応力の向上には資する授業となった。最後にこの取組による地域と学生両側における意義について述べたい。

地域側においては学生によるゼミ活動が何らかのニーズに応える限りで、一定の意義があるといえるだろう。また、地域側には自分たちの活動を広く（特に若者に）知ってもらいたいという意識を持つ人も多く、たいていは教育熱心である。この「地域の教育力」を活かすことは大学側にとっても有益である。同時に学生側の意義は、ゼミ活動での関りを通じて、自身の振る舞いが「社会人の目から評価され指摘される」ことで、彼らが日ごろの行動や生活において無視したり本気にしなかったりする教員の指摘や小言にある種の真実味を感じることが出来る点にあるのではないだろうか。

本学「地域ゼミ」は2 年次必修科目であり、参加学生のモチベーションは必ずしも高くなく、また高校から大学1 年次までに形成された学習習慣・生活習慣から、学外活動にも遅刻をしたり連絡を怠ったり打ち合わせを軽視したり、またそれらに関しての教員の注意や提案に対して頑なに拒否したりする者もいる。こうした学生にとっては彼らがやがて入っていく社会がもつ説得力を活用すること有効ではないかと思われる。ただし、地域と連携しその教育力を十分に活用するには、授業において想定される学生像を共有しておくこと、そうした学生を共に育てる意識を持ってもらうことが重要となる。自治体との包括連携に基づく PBL 実施は連携項目に応じて地域の教育力を効率よく活用できる仕組みとなりうるだろう。

なお、本研究の元となった「地域ゼミ」実施にあたり、下松市役所の中村一雄様（企画財政課・当時）、藤田幸徳様（企画財政課）、「米川ゆずの会」藤村幸男様、伊藤信弘様、江口幼稚園園長福田徳子様、そして担当授業の留学生を本ゼミに送り出して頂いた立部文崇先生（徳山大学経済学部准教授）、その他多くの関係者に、多大なるご支援を頂いたことをここに深く感謝申し上げます。

【参考文献】

- ・ 地域ゼミプロジェクト 2018 <http://www.tokuyama-u.ac.jp/applicants/community/2018.html>
- ・ 羽田司・中嶋克成・寺田篤史（2019）「域学連携による中山間地域のリソース活用—下松市米川地区のまちづくりにおける大学生の関わり—」『情報コミュニケーション学会研究報告』Vol. 16, no. 1（2019-01）、情報コミュニケーション学会（pp. 11-14）